

荒波乗り越え

コバリキ(新潟市中央区)

■4■

時代とともに
にいがた企業
ヒストリー

被災地に拠点復興支え

ユの波に乗り、現在の倍以上の売り上げがあった」と、現社長の小林建氏(60)は語る。ただ、好調は長くは続かなかった。バブルがはじじると、建氏が入社した92年をピークまで難しくなり、苦戦を強いられ、建設関連の受注は減少の一途をたどった。発注元のゼネコンがつぶれるような状況下、職人を自社で抱えること



コバリキがポンプ4台の更新工事を行った揚水機場。一帯の田んぼへ配水し米作りを支える=南魚沼市

11年3月11日。会社にいた建氏は、長期経営ビジョンを担当する。天井が崩落したスーパー馬場から「技術者をよこしてください」と急な要請があり、宮城県石巻市などに人員を派遣。

18年には南魚沼市で、川の水をくみ上げ田んぼに巡らせ

えた。総工費約2億円と手掛けた中で最大級の規模となっ

た。

現在、コバリキは約40人の社員が、揚排水ポンプ、建築内装、住宅外構、土木関連の工事などを担う。商社ならではの情報・仕入れ網、仕入れ

器に受注エリアは県内外にま

たがる。

各部門の年間売り上げは3

~5億円と、トータルで安定

した業績を誇る。リフォーム

事業やポンプ以外の公共工事

の強化でさらなる発展を描いている。

「事業は人がつくる。マネジメント力を伸ばしたい」。

建氏は力を込めてそう語る。

創業から100余年。大陸

との貿易にルーツを持つコバ

リキは、荒波を乗り越え、さ

まざまな景色を見てきた。

なかなかじ取りで、これからも

航海は続いていく。

(この連載は報道部・阿部秀哉が担当しました)

IIおわり!!

戦前の海運業を経て商社を本業としたコバリキ(新潟市中央区)。1984年に施工専門のグループ会社「コバリキエンジニアリング」を立ち上げ、建設業という新たなフィールドに踏み出していく。

バブル期には、スキーリゾートで活況たった湯沢町のマシンション建築など数多くの工事に携わった。「建設ラッジ

ム化と効率化を図った。

れる。

96年、コバリキエンジニアリングをコバリキに統合し、それを行っていた経理など

の業務を一本化。経営のスリ

ム化を実現した。

社員に発表する午後4時の会議に間に合うよう資料の準備

をしていた。その時、大きな

揺れに見舞われる。「とにかく外へ」。危険を察し、声を

響かせた。屋外に出てから携

し、目まぐるしく動いた。

全国から駆けつけた建設業

者らによって一通りの応急工

事が完了すると、復旧工事の

主体は地元企業に移った。し

かし、建氏の目に映る辺り一

地に人がいないと役に立てない」。建氏は被災地にコバリ

キの拠点を置くことを決断

し、12年春に仙台市のアバ

トの一室を借りた。急ごしら

えの営業所で、現地で不足す

る資材の供給に着手した。「初

めは新潟の社員を1週間交代

で現地に送ったが、仕事も寝泊まりも同じ部屋で苦労をかけた」

06年から住宅外構の設計、

施工に参入していたこともあ

り、次第に幅広い分野で東北

地方での仕事量を増やしてい

った。13年には仙台営業所を

移転。今では現地採用の社員

6人が営業所を支える。

創業から100余年。大陸

との貿易にルーツを持つコバ

リキは、荒波を乗り越え、さ

まざまな景色を見てきた。

なかなかじ取りで、これからも

航海は続いている。

情報と施工力強みに



「商社の情報網と建設会社の施工力を併せ持つことが強み」と語るコバリキの小林建社長